

周郷先生の講演をきいて

清水光子

「うち(私の園)はいつも行事に追われて、しみじみ保育がでないって感じなの」という若い先生の声をきいた事がある。この方のいわれる行事というのは、たぶん遊戯会とか運動会とか、屋覧会とかいった、いわば対外的な意味をもつ催しをさして言われたのだろうし、「追われて云々」は準備や後始末などのため、子どもたちひとりひとりと肌目細かくつきあう時間がないことを意味してだと思ふ。ともかく学校でも幼稚園でも保育所でも、学期(保育期)毎のくぎりや入園、修了、という年度のくぎりがあり、国民祝祭日の他にひな祭り、七夕、運動会、遊戯会など、その園として伝統的に行われている行事乃至は催しがあると思う。園の多様と同じように、これ等行事とか催しとかの多種多様であることは、当然だと思ふけれど、それに対して基本的な姿勢、考え方は子どもへの教育の場としてはつきりふまえておかなければならぬのではないだろうか。

先日、みどり会の講演会で周郷博先生に「行事について」ということでお話をいただいた。必ずしも行事のことだけではなかったが、いつもながら幼児教育に見失ってはならないものは何かという大へん示唆に富んだお話だったと思う。そのお話を私なりに実践の場に結びつけて考えたことを読んでいただき、ご意見、ご批判を賜われれば幸である。

(1)

周郷先生はそのとき「自己教育」ということを言われた。このことは倉橋惣三先生も言われていた事であるが、周郷先生は、人間という精神的な存在、それは他によって動かされるのではなく、自分で楯を取って生きていくので、幼児も当然である。その幼児の保育者は、幼児の未来、その精神生活を豊かにすることを考えるのが基本で、その幼児に真にふさわしいものは何かを考えてそ

れを与える。そのことに保育者は悩み、とことん考える。それが保育者の自己教育だといわれた。

行事についても子どもが喜ぶからよい、だけではなく、今、この子どもたちに何がふさわしいか、それは地域の環境もあろうし、季節もあろう。年齢や発達段階との関連もあろう。ようやく友だちを認め、一しょに遊び始めたばかりの時に毎年やっているから、ということで一斉に鯉のぼりをつくったり、母の日のプレゼントを何が何でもつくらせる等はどうなるものだろうという疑問を私は持つのである。形に表面に表われたことでなく、精神生活、こころを豊かにするという根本にいつも返って、行事を考えることが大切なのではないだろうか。

(2)

次に、周郷先生のお話で、行事にかぎらず保育のあり方の一つとして言われたことは、上っ面の親切や大人の趣味でやることはまちがいだと言われた。

よく耳にすることであるが、遊戯発表会の前には全く自信というものがなかった子どもが、先生の配慮と熱意で出演してから、ずっと積極的になった、だからあのようにしてよかった、とか、遠足に行くのに歩いて行ける所よりバスで遊具など沢山ある遊園地

へ行った方が親も子も楽しいだろうから、という。また、大がかりな発表会で豪華な衣装をつけたりしてはなばなしく競う、とても楽しかった。そのようなことを全面的には否定はしない。でもそのめざすところに幼児不在な、大人の虚栄やみにくい競争心があったら、子どもの心にどんな大きな傷を残すか、が案ぜられる。その意味で少なくとも反省してみたいのである。

(3)

もう一つ、周郷先生が話されたことに、保育の一貫性ということがあった。その意味は外面的なものと内面的なものとあるのではないかと思う。外面的ということはその園の教育方針につながるもので、とにもかくにもこの園は健康を第一に教育目標を立てています。とか、社会性を育てることと、音楽や美術や、芸術的な面を高めようとしているというように。内面的というのは（そう言えるかどうか不安であるが）幼児の自発性を何にもよらず尊重する保育の方針だとか、集団生活、個を集団の中で考えていくことを尊重した方針とか、宗教的なものを中心に教育を考えるとこういうことである。

いずれにしろ、その園独自の目標があり、それは多様であるし、それは当然であろうと思う。否、むしろそうある方がいいの

ではないかと思う。

そのことを、保育の、日常の保育ばかりでなく、行事の中へも通していくこと、表面に表われたことでなく精神に通していくことが大切だということを周郷先生は言われたのではないかと思う。

仏教的な幼稚園で、毎朝必ず仏前に手を合わせてから保育が始まり、運動会でも、誕生会でも仏様に手を合わせ、讃仏歌をうたって始まる。こうしているから一貫した教育がなされているとは思えないのではないか。一貫したものというのはもっと深いもの、形でなく、心の底から出る、大いなるものの前の人間を謙虚に考えた所から出る何か、それを通していくということではないかと思う。

(4)

柄にもなくいろいろと書いたものの、果して周郷先生のお話のま、と近づけたかどうか、とても近づけはしなかったと思う。が、私としてはこんなふうに考えました、ということ、いや、それはこうだ、というお考えをぜひお教え願いたいと思う。

何はともあれ、幼児の集団の生活の場であり、教育の場である幼稚園や保育園では、幼児の生活である遊びを中心として、その

生活の充実を指導すること、集団の中にひとりひとりを埋没させることのないように、日々の保育はもとより、行事にも配慮し、方法をくふうすることが保育者の心がけではないかと思う。その心がけの根底に、周郷先生のお話をしっかりおいて、そこから葉を出し、繁らせるようにたえず私たちは自己教育をしていきたいものと思う。

最後に言いたいことは、保育者ひとりひとりも考えても、園長や設置者が判ってくれないからどうにもならない、ということを引きが、本当にどうにもならないだろうか。きっと、道は開けると思う。若し、その考え方が本ものであるならば、そして、自分のためでないのだったら。

秋から冬、新年へ、行事といわれるものがたくさんある。ちょっと立ちどまって考えてみようではないか。

(音羽幼稚園)

